

まいづる

次号の折り込みは1月16日(日)

〈舞鶴市ホームページ〉 <http://www.city.maizuru.kyoto.jp/>

今号の主な内容

環境基本計画(素案)に意見を(2ページ)、引揚記念館あり方検討委員会が中間とりまとめ(3ページ)、特集・いい汗流そう〜みんな気軽にMyスポーツ〜(4・5ページ)、舞鶴海の恵みがいっぱい(8ページ)

まいづる花図鑑

フユイチゴ



バラ科 見ごろ…12月～1月 (果実)

関東以西の山地の木陰や人里近くの林道沿いなどによく見られる常緑のつる性小低木。茎は直立または斜めに伸び、高さ約20～30センチで全体に毛が多く、まばらにとげがある。別に根元からつる状の枝を伸ばし先端に新芽を出し増える。夏、葉の脇に白色の花をつけるがあまり目立たない。果実は赤く熟し食べられる。名前の由来は、冬にイチゴのような果実が熟することから。

協力=瓜生勝朗 市文化財保護委員(植物分野)

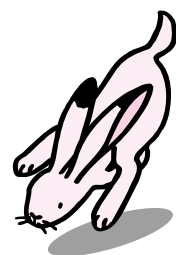


守り続けたい
希望に満ちた子供たちの笑顔

「おもちゃと絵本のわくわくフェスティバル」でのびのびとおもちゃ遊びを楽しむ親子(12月18日=まいづる智恵蔵)



新年のごあいさつ



地域の存続は人づくりにあり



舞鶴市長 齋藤 昌弘

んからお話を伺う機会があり、こんな逸話をご紹介いただきました。作家の司馬遼太郎氏が、第17代当主・細川護貞氏に「細川家は中世も含めると700年もの長きにわたり存続している。戦国乱世や政変の真つただ中にいながら生き抜くことができた武家は他にはない。その理由は何か」と聞かれました。それに対して護貞氏は、「細川家は、これを支える『人材』に恵まれ、また、そうした『人材』を作り上げたこと、そして、武家でありながら『文武両道』の家風であり、『文』を大切にすることで細川家が一目置かれ、それが家を助けてきた」と答えられたそうです。

これら長年にわたった大型プロジェクトの実現は、これからの地域経済の発展と市民生活の向上に大きく貢献していくばかりでなく、関西経済圏における本市の役割を着実に高めるものであり、大きな期待を寄せているところでもあります。また、昨年は、城下町の礎を固めた細川幽齋公の没後400年を迎え、歴史を振り返るきっかけとする記念事業を展開いたしました。その中で、幽齋公の子孫で細川家第18代当主・細川護熙元首相令夫人の細川佳代子さんが、改めて、舞鶴がほか

この細川家存続の秘訣は、時代が移り変わり、社会の仕組みが根本的に変わっても、今の時代、市政の推進や地域社会づくりにも相通するものがあると感じているところでもあります。地域社会を支える『人材』をどれだけ確保できるか、次代を支えていく『人材』をどのように育成していくことができるか、これが地域の存続や浮沈を左右するのではないかと思います。また、『文武両道』とは、与えられた当たり前の勤めを果たすことはもちろん、他者から何か一目置かれる特長や付加価値を持っていることに置き換えられるのではないかと考えられます。今、改めて、舞鶴がほか

のまちから一目置かれるまちづくりや、地域を支え、次代を担う『人材』づくりを市政の基本として取り組んでいくことが重要であると考えております。さて、私は市長に就任以来4年間、常に市民の皆様への幸福につながるものは何か、そのためには何をなすべきか、それを原点として市政にまい進してまいりました。その基本姿勢のもとで、本年も『市民の皆様とともに汗を流しながらまちづくりを推進してまいりたい』、これが私の強い思いであり、最大の願いでもあります。本市では、現在、これからのまちづくりを進める指針を明らかにした総合計画の策定を進めているところであり、『まちの安定的成長』

「みんなで支え合う地域社会づくり」「次世代を担う人材育成」の3つの柱をもって戦略をたて、今後、取り組むべき施策を提案していきたいと考えております。変化の著しい時代に柔軟に対応していくため、幾多の困難はありますが、市民の皆様の英知をいただきながら、一丸となってこれを打破する年にしてまいりたいとの決意をもって市政に臨んでまいります。皆様の一層のお力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。年頭にあたり、市民の皆様のご多幸とご健勝を心からお祈り申し上げます。新年のごあいさつといたします。